

---

# 魔王はここに

藍猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王はここに

### 【Nコード】

N6573Y

### 【作者名】

藍猫

### 【あらすじ】

死んで、気付いたら魔王になってました。

・・・なんででしょう？

「そういう運命なんです！」

「誰ですか！？」

ロリ魔王が生きていく話です。

ぶろろーぐです。(前書き)

書きたいと思っていた魔王&最強系です。

気楽に読んで下さい。

ぶろろーぐです。

私は死んだ。

何もない空間の中で私は唐突に理解する。

・・・あゝあ つまんない

やっと人生の楽しみ方ってやつが分り始めたのに・・・

ま、私なりの・・・だけだね

・・・暇・・・

・・・って・・・ん？

あれは・・・だーくほーるか？

え……ちょ……吸い込まれる！？

い……やあああああああ！！！！？

私は死んで、変な空間を漂って、だーくほーるに吸い込まれた。

私を吸い込んだだーくほーるは、役目を終えたように消えていき、後には何もない死後の世界の空間だけとなった。

私はこの空間で、あのだーくほーるにのまれ、別の世界に転生する ための”私”であり、別にこれは神様のミスだったりはない。だからといって嫌われているわけじゃない。ただそういう”運命”だったというだけ。

ま、私は実際そんなことは知らないのだけど。

とらふらふ

私は今、

だーくほーるの中にいる。

・・・ふらふら・・・？



ぶろろーぐです。(後書き)

ありきたりな内容でごめんなさい・・・



1話 びしょうじょです。(前書き)

話作るのにはなかなか慣れないです・・・。

ハア・・・

## 1話 びしょじょうです。

・・・ここはどこ？

視界が開けたら森でした。

普通の森よりも、なんていうか・・・暗い？感じの森。

にしても動きづらい・・・

私はふと自分の体をみる。

「・・・は？」

なんかちっさい・・・

手も腕も脚も・・・まさか・・・

子供になってる・・・？

というかそもそも私は死んだんじゃないかなかったっけ？

・・・私は転生した？？

「……よし。よく分かんないけど理解した。」

私は唯一の自慢である並外れた適応力で今の現状に適応する。

んじゃあ今の姿にも適応しますか……

トテテテ と近くの湖へ駆け寄り、覗き込む。

「……び……美少女……」

映っていたのはまさしく美少女だった。質素な黒いワンピースを着ており、見た目は6〜7ぐらいの小さな少女。それが自分とわかっていても、しばし魅入ってしまうほどの美貌だった。

「……なんか犯罪な気がする……」

この見た目で中身が18歳っていうのが。

ガサッ

「……誰？」

突然の草の動きに対して私は冷静に聞く。何かがいるっていうのは気付いていたから大して驚くことはなかった。

「ほう……。なかなか鋭いようだな。子どもとはいえ魔族ってことか。」

さっきまでこそそとしていた態度とは打って変わって、堂々と意味ありげにニタニタとした男が出てきた。厳つい風貌で、背中には大きな両手剣を背負っている。ニタニタとした目に私は無意識にゾクツとする。

「・・・魔族？」

「あ？その黒い髪と瞳は魔族の証だろうが」

湖は少し濁っていたから色まではわからなかった・・・。

「・・・それで、なんの用？」

「・・・何って、決まってるだろ？」

男の目つきが怪しく光る。

森の中にて、

なんだか嫌な予感がします・・・

・・・じりじり・・・？

1話 びしょうじょです。(後書き)

・・・あ

名前、まだ一度もでてませんね・・・

次ぐらいでだすと思います

2話 うそつきです。(前書き)

「どうしよう」「が最後にくるように  
なんだかんだで頑張っています。

## 2話 うそつきです。

「道案内してくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

先ほどまでのニタニタ笑いが消え、真剣な顔で男が言う。まさか、これほど予想外なことを言われるとは思わなかった私は、10秒ほど口を開け、啞然としてしまった。

「いや、だから道案内を・・・・な？」

「・・・・・・・・いやいやいや・・・・何ですか？」

「迷ったからに決まってるだろ？他に理由があるか？」

「・・・・・・・・ないですね・・・・はい」

緊張していたことが恥ずかしい・・・・。私は脱力し、溜息をつく。そして、目線を男に戻し改めて見て、気付く。男からにじみ出る黒いもやに。またにやりとした表情になっている男は気付いていないようだ。



・・・このもやまとした森の影響？・・・大丈夫だね・・・？

「どうかしたか？嬢ちゃん？」

男は怪訝そうに聞く。私は思いつき不安そうな顔をしていた様だ。そのことに気づき、すぐに初対面用の作り笑顔を浮かべる。

「いえ・・・特に何もありません。・・・所で、何故こんな所で迷っているんです？」

ここがどこかも分かっていない私が言えることじゃないな・・・。

「・・・ちよつと人を探してて森に入っただが気付いたら迷ってたんだ。」

「うそですね？」

「!!」

男の顔が驚愕に満ちる。

人を探して森に入った？こんな危険そうな森に1人で？・・・ありえない。

道案内？こんな子どもに？馬鹿じゃないの？

仮にこの森が危険じゃないとしても、その大きな剣は何のために？

おかしいことが多すぎる。それに道案内を頼むなら、何故隠れる必要がある？

・・・今なら分かる。あの男からにじみ出る黒いもやは嘘を吐いた証だと。あの男が口を開くたびに黒いもやは出ていた。あの男は嘘ばかりだ。こういうやつは嫌いだ……。この・・・

「うそつきっ!」

ザアアアアア・・・

黒ずんだ植物が、私を中心に枯れていった。

今だ森の中にて、

何故か怒りを表わした私の周りの植物が枯れたいきます。

・・・じじい・・・？



2話 うそつきです。(後書き)

・・・ごめんなさい・・・

結局名前出せませんでした・・・

しかもなかなか話が進まないです・・・

3話 びしょうねんです。(前書き)

正直いってまだ名前考えてないんです・・・

まさしく」「どうしよう・・・?」ですね・・・

### 3話 びしょうねんです。

「うそつきっ！」

ザアアアアア

私の咆哮と共に弧を描きながら草が枯れる。

ただ、枯れたのは地面に敷き詰められた草だけで、大きな植物や木は私の咆哮に合わせて揺れるだけだった。足元の草が枯れたことに気付いた男は、力なくへたれこむ。

「ば・・・化物・・・ひ・・・ひiiiiiiii!!」

恐怖に彩られた声野太い声が当たりにこだます。

そんな男に私は無意識に手をかざす。そして力を込めて言葉を発する。

「・・・死んで？」

瞬間、私の感情と共鳴していた周りの木々が伸び、男を襲つ。

「ぎ……が……ああああああ!!」

ブシュ

その音と共に男の声が途絶える。

木々が戻っていく。そこには血一滴もなく、代わりに枯れたはずの草が広がっていた。男を養分にしたのだろう。草はどす黒い光を放っている。

「……なに?今の……」

私は今起こったことに呆然とする。あの男を殺したのは、多分私。木を操ったのもきつと私なんだろう。でもどうしてこんな力が……?

……もしかして私、転生したのは異世界?

……ならさっきあの男が言っていた魔族っていうのが私……?

「うーんややこしい……ん?」

何かが近付いていることに気づき、考えることを中断する。

ぐんぐんとすごい速さで気配が近付いてくる。

……これは3人?いや、2人か……?……来る!



ザザザアアアア

ザンツッ!!

森の木々から出てきて影は私の目の前に姿を現す。ビュオオオと風が吹き抜ける。

出てきたのは2人。執事服の少年とメイド服のお姉さん。2人も漆黒の髪と瞳で神秘的な顔立ちをしており、その綺麗な瞳で私を見ている。

うわ・・・美形だあ・・・

座り込んだまま呆けていると、綺麗、というより可愛いらしい微笑みを浮かべた執事服の少年（10〜12歳？）が手を差し出す。

「お手をどうぞ?」

・・・やばい・・・すっごくきれい・・・。

きらきらした空間にて、

きれいな少年に目を奪われてしまいました・・・

...? ...? ...? ...? ...? ...? ...? ...? ...? ...?



3話 びしょうねんです。(後書き)

主要人物はどうしても美形になってしまう・・・

願望とかじゃないですよ？

・・・多分・・・

4話 まおうですか？（前書き）

なかなか進まない

やっと魔王についての話になってきました！



・・・魔王城・・・魔王様・・・魔族・・・

ここが元いた世界じゃない・・・つまり異世界だと認めざるえない言葉だ・・・

死んで、吸い込まれて、異世界に転生した・・・と。なんでこんな事になったんだろう・・・

「・・・気になる事はたくさんあるけど、今はまあいつか。・・・うん。その魔王城に私を連れて行って。後、この世界にのことを教えてほしいんだけど・・・いいかな？」

前半は独り言。後半は2人に向けての言葉。

2人は快く引き受けてくれた。ちょっと衝撃的な言葉で。

「もちろんです！！魔王様の言つとおりに！！」「」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ！？」

「さっ。僕におつかまり下さい！」

「へ？あ、ちょー！？」

つかまってつて言うからつかまったのに、何故お姫様だつこするの！？しかもけつこう嬉しそうですね！？

「・・・つて、魔王つて私なの！？」

「はい！説明は後ですが・・・確かにあなたが魔王様です！僕だけじゃなく、ほかの魔族の人達もあなたの存在に気付いてると思いますよ。きつと」

「・・・何でそう思うの？」

「なんで・・・と言いますと・・・存在が、ですかね？」

「・・・答えになってない・・・」

「と、とにかく存在が魔王様なんです！あ、後、その膨大な魔力とか魅力とかですね」

「魔力？は何となく分かる・・・。けど魅力つて？どう見ても私6歳ぐらいだと思っただけ・・・」

え・・・何？この人達つてそっち系なの？うわ、引くわ・・・

「まあその話は後でしてくれるんだよね？そういうことならはやく行こ！」

「「はい！！」」



少年の腕の中にて、

あ．．．まだ自己紹介してない．．．



#### 4話 まおうですか？（後書き）

結局名前はまだ出てないです。

名前が出てから人物像について説明しようと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6573y/>

---

魔王はここに

2011年11月23日12時45分発行